



ごあいさつ

われわれ人類が地球上の様々な場所で直面している地球環境問題は、この21世紀において解決すべき最大の課題であります。しかし、どのような問題がどのようにあり、どのように解決してゆか、それを考えることは容易ではなく、包括的な視点で自然や社会にアプローチしなければなりません。このアプローチはまさに生態学が持つ自然に対するまなざしの向け方そのものです。そのため、生態学の社会的な役割は近年ますます大きなものとなってきています。

京都大学生態学研究センターは、さまざまな地球環境問題の解決に少しでも貢献するため、さまざまな生態系において、動物・植物・微生物など多様な生物を対象として、分子生物学・安定同位体・理論生態といった多様な解析手法を駆使する研究者が一堂に会し、生物多様性や生態系の機能の解明、そして生態系の保全に関する理論を構築することを目的として、生態学の国内外での研究を推進しています。

京都大学
生態学研究センター長 木庭 啓介



沿革

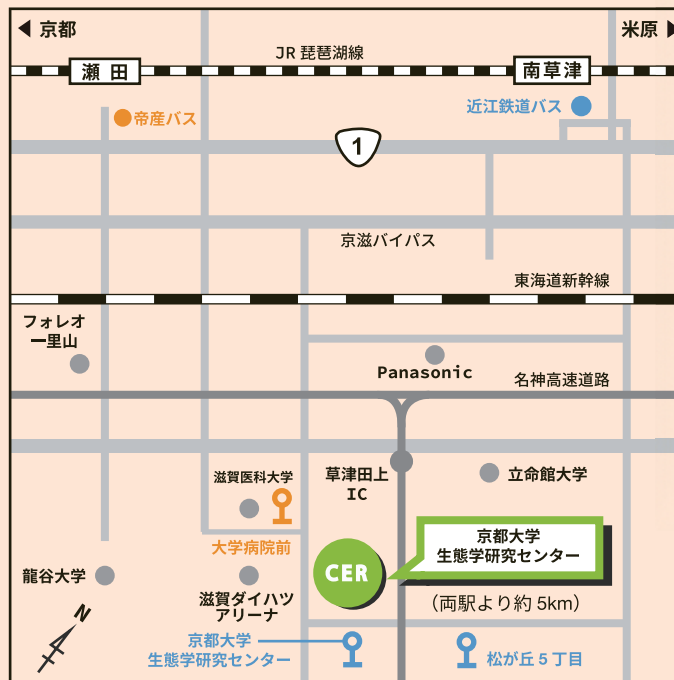
- 1914年（大正3年）9月25日
京都帝国大学医科大学附属臨湖実験所創立
- 1922年（大正11年）4月1日
京都帝国大学理学部附属大津臨湖実験所となる
- 1964年（昭和39年）4月1日
京都大学理学部附属植物生態研究施設設置
- 1991年（平成3年）4月12日
上記2施設を母体として生態学研究センターを設立
- 1998年（平成10年）8月1日
滋賀県大津市上田上平野町に新実験棟を竣工
- 2001年（平成13年）4月1日
第二期生態学研究センター設立
- 2004年（平成16年）4月1日
国立大学法人化に伴い、国立大学法人京大生態学研究センターとなる
- 2010年（平成22年）4月1日
生態学・生物多様性科学の共同利用・共同研究拠点（～2016年3月31日）
- 2016年（平成28年）4月1日
生態学・生物多様性科学の共同利用・共同研究拠点（再認定）（～2022年3月31日）
- 2022年（令和4年）4月1日
生態学・生物多様性科学の共同利用・共同研究拠点（再認定）（～2028年3月31日）

生態学・生物多様性科学の 共同利用・共同研究拠点として

生態学に関する共同研究を推進する全国共同利用施設として機能しており、毎年度共同研究と研究集会・ワークショップを公募しています。

生物多様性・生態系研究基金

研究者ネットワークと研究設備を強化して、西太平洋・アジア地域の生物多様性・生態系研究を牽引するとともに、生態学研究を担う人材育成のために役立てていきます。



■JR 京都駅から（大津・米原方面行き）

- ・「普通」「快速」列車（17分）⇒「瀬田」駅
- ・「新快速」列車（17分）⇒「南草津」駅

●瀬田駅から（帝産バス 301 系統）

- ・「大学病院」行き（15分）⇒「大学病院」徒歩 15分

●南草津駅から（近江鉄道バス南草津飛鳥線）

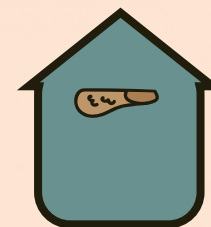
- ・「松ヶ丘5丁目」行き（20分）⇒「松ヶ丘5丁目」徒歩 10分
- ・「県立長寿社会福祉センター」行き（20分）⇒「生態学研究センター」

京都大学 生態学研究センター

〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
TEL：077-549-8200（代表）／FAX：077-549-8201
<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/>



日本語

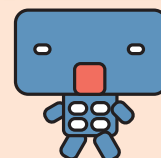


らしいよ



Center for
Ecological Research

京都大学 生態学研究センター



みてね





研究分野

研究分野は 4 つの分野から構成されます。
大学院教育にあたり、理学研究科生物科学専攻の生態科学Ⅰ（動物学系）、生態科学Ⅱ（植物学系）のいずれかの分科に協力講座として所属しています。

生物多様性生態学

自然界においては、いかなる生物も他の生物と何らかの「つながり」をもっており、生態系のネットワークを作り上げています。このようなネットワークに注目して生物多様性の維持・創出メカニズムを解明し、生物資源管理や生物多様性保全のための理論的基盤の確立を目指しています。

環境生態学

あらゆる生物や生態系は、環境の変化にさまざまに応答し、また環境に影響を与えます。人間による環境の改変が顕著になり「人新世」とも呼ばれる現在、環境と生物・生態系の相互作用を理解することはより一層重要になっています。本分野では、生態系や生物多様性について現状の把握やそれらと環境の関係を明らかにする基礎研究に加え、それらの恩恵（生態系サービス）の評価や保全といった、自然資源の持続的利用を探る研究も進めています。

分子生態学

生態系における生物の適応、環境応答、生物間の相互作用、物質とエネルギーの流れを DNA/RNA 配列、遺伝子発現、エピジェネティック修飾、安定同位体比などの生体分子情報を用いて解き明かします。

理論生態学

地球生態系における進化、生態、人間活動に関わるさまざまな現象を対象に、主に数理モデルやシミュレーションに基づく理論的考察を通じて、現象のパターンとそのメカニズムの解明を目指します。



DIWPA DIVERSITAS in the Western Pacific and Asia
(Biodiversity Network)

西太平洋・アジアにおける生物多様性の研究や情報交換を促進する研究者のための国際的ネットワークの事務局をつとめています。



教員一覧



佐藤拓哉 教授
群集生態学

森や川、海がつながるメタ生態系を舞台に、野生動物の生活史多様性と個体群動態の関係、

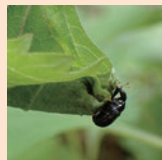


季節的な群集形成・生態系機能の関係、群集による感染動態の制御機構、さらには寄生者による宿主操作の分子機構とその生態的帰結に関する研究を進めています。



樋口裕美子 准教授
植物生態学

野生植物の示す多様な形態、特に葉の形や模様が自然界でどのように機能し進化してきたのかに興味をもち、研究しています。



現在は特に葉を加工する昆虫や葉を食べる動物との相互作用に着目し、野外調査や行動実験から葉の形状の機能を調べています。



木庭啓介 教授
生態系生態学

安定同位体比（ ^{14}N と ^{15}N の自然界での比率など）をつかって、様々な生態系での生物と生物の関わり、環境と生物の関わりを研究しています。

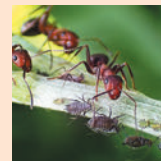


物質から生態系を見ることが、特に生物と環境の相互関係を調べています。



山尾 僚 教授
進化・群集生態学

植物は動物や微生物、そして周囲の他の植物とさまざまな関係を築きながら生育しています。



この研究室では、これらの関係性を解明するとともに、そうした生き物同士の関係性がどの様に植物の進化や地球上の生物多様性のパターンを形成したのかを調べています。



工藤 洋 教授
植物分子生態学

植物の生活史を分子の目から理解することを目指し、シロイヌナズナ属の多年草ハクサンハタ

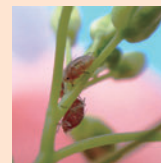


ザオの自然生育地で研究しています。遺伝子発現のフェノロジーとクロマチン構造の長期変化との関係から、変動環境下での植物の頑健な応答を理解したいと考えています。



本庄三恵 教授
生物間相互作用学

植物がウイルスや昆虫など病食害生物に示す防御応答や形質変化に着目し、どのように共存・



生存しているのか、その相互作用に興味をもち研究しています。遺伝子発現解析や群集構造解析、操作実験を通して、制御に関わる遺伝基盤や分子機構、個体群動態を調べています。



中野伸一 教授
陸水・微生物生態学

湖沼や海洋の細菌、原生生物、植物プランクトン間の食う・食われる関係を研究してきました。

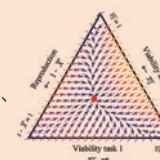


特に、富栄養化湖沼で発生するアオコを巡る生物間相互作用の研究には独創性があります。近年は、底生動物（ベントス）の生態についても研究しています。



山内 淳 教授
数理生態学

生物の数の変化や性質の進化の過程を数式で表現し、それを解析することで、生物に見られる



現象がどんな要因の影響を受けて生じているのかを明らかにすることを目指しています。例えば最近では、社会性を持つ生物における労働分業の進化などを研究しています。



大竹裕里恵 助教
湖沼生態学

湖沼生態系と、その主な構成要素の一群である動物プランクトンを主な対象として、集団遺

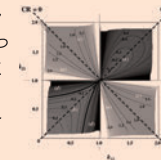


伝構造から生態系機能まで幅広く生態学・進化学に関するトピックスに取り組んでいます。顕微鏡観察や培養の他、湖沼堆積物を用いた長期動態の復元なども行っています。



谷内茂雄 准教授
理論生態学

数理モデル（数式）を使って、地球の生態系に起こっている生命現象の謎解きに取り組んでいます。



現在は、多細胞生物がどのように進化してきたのか、また、社会と生物多様性が共存できるための仕組みについて理論的な考察をまとめています。

